

ヨリ見テ首肯スヘキ點多ク、愚見ニ依レハ會商中止ノ時期ヲ來春ニ引延ハス事ハ困難ナラサルヘキモ、越田「ヘ」ノ前後二週間ノ會談ニ依リ先方ノ大體ノ意向モ亦當方ノ目標モ既ニ互ニ承知シ居リ、我方ヨリ新ナル讓歩（殊ニ砂糖再輸出問題數量増加）ヲ示ササル限り此儘ニテハ長岡「ラ」會見ニ於テ情勢ノ新ナル展開ハアリ得ヘシトモ思ハレス、從テ妥協ノ爲ノ新ナル御考案アラハ格別、會商妥結ノ至難ヲ見透シテ今ニ於テ本省ノ腹ヲ決メ御指示相成ル事ヲ切實ニ希望ス。

十二月十日來栖局長ヨリ木村顧問宛。

一、屢次電報ノ通り本省トシテハ出來得ル限り會商ヲ繼續シ何トカ妥結ニ達シ度、大臣ニ於テハ諸般ノ事情ニ鑑ミ特ニ顧念セラレツツアル次第ニシテ、十二月四日打電ノ事情ニ依リ次キノ兩首席代表會見ノ結果御請訓ノ如何ヲ見テ、關係省其他ヲ説得セントシツツアル次第ナリ。

二、從テ此ノ際「ヘ」ノ歸國ヲ契機トシ一切ヲ總決算トスルカ如キコトハ避ケ度、其上ニテ報告其他ノ爲長岡代表等ノ歸國ハ或ハ己ムヲ得サルヘシト思考シ居レリ。

委員會ノ第二回報告書ハ十二月十日ニ其作成ヲ終ツタカラ、十一日筆者ハ「ランネフト」代表ト會見シタガ翌十二日朝「ファン・ヘルデレン」教授ハ出發歸國ノ途ニ上ツタ、「ラ」トノ交渉其他ニ付テハ章ヲ改メテ記載スルコトニスル。

第九章 日本ノ最後總括提案ト會商ノ中止

日本總括提案

十二月十一日例ニ依リ會議場ニ於テ筆者ハ「ランネフト」代表ト會談シ、當方カラハ越田代表、蘭側カラハ「ヘルデレン」教授及「イーデンブルグ」書記長ガ陪席シタ、其會談要領ハ左ノ通りデアル。

一、本使ヨリ東京ト照覆ノ結果作成セル別紙一ノ日本側總括提案ヲ渡シタル上、別紙二、ノ如キ註釋ヲ加ヘタルニ、「ラ」ヨリ右註釋ノ寫ヲ得度キ旨要求セルニ付之ヲ手交シタリ。

右終リタル後二三質問ノ上「ラ」ヨリ何レ篤ト研究シタル後數日內ニハ回答シ得ルコト、思フカ、唯今他ノ手續問題ニ付テ御話シ度キコトアルカ如何ト云ヘルニ付、本使ハ右ハ多分今後ノ會商措置ニ關スルモノト思ハル、所、一般ニ遵守サレタル方法ハ當方ヨリ提案ヲ提出セルニ就テハ、先ツ之カ回答ヲ寄越スヘキニテ、右回答後ニ其他ノ問題ハ讓ラルヘキコト普通ナリト思考スト指摘セルニ、「ラ」モ之ヲ首肯シ其他ノ問題ニハ何等言及セサリキ。

二、「ラ」ハ輸入制限ニ關スル一般法ニ於テ歐洲人商業組合加入ノ條件ハ之ヲ廢止スルコト、セリ、又之ハ暫定法ナルカ未晒ニ付日本人ノ「シエーア」ヲ二割五分迄引上クル筈ナリ、尤モ之ハ直ニ其比率ノ適用ヲ受クルニ非スシテ累進法ニ據ルモノナリト説明ヲ加ヘタル故、本使ハ本件ハ「ホーフストラーデン」

氏ト姉齒領事トノ間ニ話合ハレ居ル問題ナレハ、姉齒領事ニ至急「ホ」ト面會スル様申傳フヘシト述ヘ置ケリ。

別紙一、

覺 書

日本代表部ハ茲ニ和蘭代表部ニ對シA表乃至D表ノ輸入及輸出ニ關スル提案ヲ提出ス。
本提案ハ輸入問題及輸出問題ヲ相關不可離ノ一體トシテ考察シ、其總括的規定ノ骨子ヲ記述セルモノナリ、從テ二問題ヲ分離シテ協定スルコトヲ求ムルモノニ非ス。

本提案ハ討議ノ基礎タル骨子ナルヲ以テ、右骨子ニ關シ妥結ニ到達シタル場合ニハ、起草委員會ヲ設ケ合意成立セル基礎原則並ニ必要ナル規定ヲ包含スル條約草案ヲ作成ス。

日本代表部ハ和蘭代表部ヨリ速ニ右提案ニ對スル回答ヲ得ハ幸甚ナリ。

「バタヴキヤ・セントルム」、一九三四年十二月十一日

A 表

輸入ヲ制限セラレ得ル日本商品ノ種別及許可最低數量提案

統計番號	品 名	單 位	數 量
二七	ビスケット	千 瓦	六三
四九	野菜類、瓶罐詰類	〃	三三
一二二	果實罐詰	〃	九四
二一八	衛生用綿	〃	七
三三九	賣藥 小賣用ニ包裝セラレタルモノ	〃	一六一
三四一	〃 小賣用ニ包裝セラレザルモノ	〃	一五
三五七	過磷酸鹽類	〃	二、四八一
三九九	其他ノ塗染料 特記セラレザルモノ	〃	五五〇
四〇三	カルシウムカーバイト	〃	六二三
四一八	化粧石鹼	〃	六二五
四一九	洗濯石鹼	〃	二三二
四四八	衛生用陶器 移動可能ナルモノ	〃	一〇
四四九	〃 固定セルモノ	〃	四五
第九章	日本ノ最後總括提案ト會商ノ中止		三五五

四六六	窓硝子 着色セザルモノ	千平方米	一一八
五四三	短靴、長靴、スリッパ類	千打	四
五六七	毛織物	千疋	六四
五六八	毛交織物	千疋	四
五八四	包裝用以外ノ索繩類	ノ	七三
五八八	綿メリヤス、シャツ	千打	一、三四七
五八九	下着類 綿物メリヤス製品、特記セザルモノ	千疋	六一
五九二	綿靴下	千打	二二〇
五九三	新聞料紙	千疋	一、一〇六
六一五	包裝用紙（古新聞以外）	ノ	五一四
六二〇	筆記用紙	ノ	九六八
六二二	特記セザル印刷物	ノ	二四一
六三九	紙袋、紙函	ノ	五三
六四〇	鐵錠類	ノ	一〇〇
七三八	エナメル 鍋	千打	二〇
七四二			

七四六	ノ 皿指洗湯呑、匙、其他食器	千疋	二、一二一
七六四	銅製電線	ノ	一四九
八九〇	電 纜	千米	六二
八九六	蓄電池定置式	千疋	二六六
九一三	刃物類ペンナイフ	千打	七五
九一四	鋏、バリカン類	ノ	六七
九一五	家庭ナイフ	千打	二〇
九一六	剃 刃	千疋	九
四二三	陶器皿、コーヒー碗	千打	一五〇
四三五	ノ 其他	千疋	六五
四三六			
四三七	磁器皿、コーヒー碗	千打	四、六一〇
四四三			
四四五			
四四四	ノ 其他	千疋	二、七五四
四四六			

四四七	接待用陶磁器	〃	一、四六三
八三三	自轉車	千匁	一二
八三四	〃 部分品	千匁	五、〇二四
四七四	硝子コップ	千打	八一〇
四七五	〃	〃	二二一
四七八	封度瓶	〃	一、〇九一
四七九	〃	〃	六、五一四
五〇六	ベニヤ箱	千匁	二八九
二五〇六	カンバス、ゴム靴類	千打	九、二六八
五四四	亞鉛引鐵板	千匁	二三
七〇八	自動車タイヤ	千個	二二
七一〇	〃 チューブ	〃	一、二七九
九五九	自轉車タイヤ	〃	
九六〇	〃 チューブ	〃	
九六三	自轉車タイヤ	〃	

九六四	〃 チューブ	〃	一、三四一
五六一	未晒綿布	千碼	六〇、五〇一
五六二	晒綿布	〃	六五、一四二
gs 一五四三	a 平織モノ	〃	一一、四三二
gs 一五六五	b 綾織モノ	〃	二、三八六
gs 一五六六	c 其他	〃	七五、七六五
gs 一五六七	染綿布	〃	八八、〇七二
一五六九	捺染綿布	〃	五八、八〇二
五六三	糸染綿布	〃	三、六二四
五六四	其他ノ綿布	千匁	五、〇九〇
五六五	人絹織物	〃	一、一六九
五六六	〃	〃	
五七一	〃	〃	
五四九	〃	〃	
五五〇	織 糸	千匁	
五五一	〃	〃	
二五五〇	〃	〃	

五五二	綿縫糸	〃	二〇九
五七七	バスタオル	千打	四一五
五七七	綿毛布	千枚	七六六
	糸染サロン類		
gs 一六〇三		千コード	三五二
一六〇八	a 綿製ノモノ		
gs 一六一八	b 人絹及同交織ノモノ	〃	二五
gs 一六一六	c 其 他	〃	三
「ノート」			

(一) 綿布類ノ移讓制

日本産綿布ノ協定總輸入數量ノ範圍内ニ於テハ日本政府ノ要求ニ依リ各品種毎ニ其二割五分ヲ限度トシテ之ヲ増量スル爲各品種ノ數量ヲ移讓スル事ヲ得、當該品種ノ細別數量ノ移讓ニ付亦同シ。

(二) 麥酒及「ボートランド・セメント」ニ關スル保障條項。

(イ) 麥 酒

本條約期間中ハ蘭印ニ於ケル日本産麥酒輸入許可數量ハ一九三四年第三非常時麥酒輸入制限令ニ限定スル數量ノ割合ヲ下ラサルヘシ。

(ロ) 「ボートランド・セメント」

本條約期間中ハ一九三三年九月十八日「バダン」洋灰會社ト日本洋灰輸出組合トノ間ニ締結セラレタル協定中ノ出荷比率表ニ基キ、日本産洋灰ノ蘭印輸入許可數量確保セラルヘシ。

B 表

日本商人ノ輸入比率提案

一、A表ニ依リ取極メラレタル各日本商品ヲ日本商人カ輸入シ得ル數量ハ概表記載ノ當該各商品ノ數量ニ對スル割合ヲ以テ之ヲ定ム。

前項ノ割合ハ一九三三年ニ於ケル當該日本商品ノ蘭印輸入數量ニ對スル日本商人ノ輸入シタル數量ノ割合トス。

前項ノ數量及割合ノ算出ニ關スル細目ハ在「バタヴキヤ」日本總領事及蘭印官憲協議之ヲ決定スヘシ。
二、日本商人カ前號ニ依リ決定セラレタル數量ノ範圍内ニ於テ商品ヲ輸入スル場合ハ、輸入ヲ困難ナラシムルカ如キ各種ノ條件ヲ附セラルルコトナキモノトス。

三、日本商人ハ前記一、ニ依リ決定セラレタル數量ノ範圍内ニ於テハ、其全部又ハ一部ヲ他人ニ讓渡スルコトヲ得ルモノトス。

(筆者註、本提案ニ於テ具體的比率ヲ掲ケス一九三三年ノ實數トセルハ、爪哇在留邦商ノ申告ニ基キ算出

セル比率ニ從ヒ此前ノ比率提案ヲ爲セル處、先方ノ反駁ニ遭ヒ其後調査ノ結果甚タシキ誤謬ヲ發見セル爲斯クノ如キ醜態ヲ繰返サル用意ナリ。

C 表

輸入ヲ制限セラルル日本商品以外ノ日本商品ノ輸入保障ニ關スル提案。

本條約ノ所定ノ協定制限商品以外ノ一切ノ商品ニ對シテハ、本條約期間中蘭印政府ハ何等ノ輸入禁止若ハ制限又ハ右等ニ關スル一切ノ措置ヲ採ラサルヘキコトヲ約ス。

D 表

蘭印物産ノ輸出ニ關スル提案。

- (一) 日本政府ハ當業者ニ對シ本條約期間(三年)中爪哇糖五十萬米噸購入方勸奨スヘシ。
- (二) 他ノ蘭印產品ニ關スル當業者ノ買付方勸奨ニ付テモ日本政府ハ能フ限り好意的考慮ヲ加フヘシ。
- (三) 蘭印ヨリ日本ヘノ輸出ヲ増加セシムル爲ニハ日本輸入業者カ買付ヲ欲スル蘭印產物ノ輸出ニ對シ蘭印政府又ハ「トラスト」、組合、協會等ニ於テ輸出ノ障害ヲ出來得ル限り除去又ハ緩和シ便宜ヲ與フルコトヲ必要ト認ム。

一、大阪ノ武田長兵衛商店ハ毎年六百噸ノ規那皮ノ購入ヲ希望ス。

二、大日本製糖會社ハ「ゲダレン」工場製ニ係ル砂糖輸出ヲ希望ス。

三、木材、護謄、「コブラ」「ダマル」「ボーキサイド」其他ノ礦物類ノ輸出及積出上ノ便宜ヲ供與スルコトヲ希望ス。

四、其他蘭印日本人企業ヨリ生スル產物ノ輸出上ノ便宜ヲ供與スルコトヲ希望ス。

五、在「ニュー・ギニア」「マノクワリ」ノ南洋興發會社ハ「ニュー・ギニア」所在「モミ」及「サルミ」ニ於ケル棉花栽培ニ付許可方希望シ、右許可ノ申請ハ「テルナテ」理事官ヲ通シ一九三三年九月及十月蘭印政府ニ爲サレタリ、又同會社ハ「マノクワリ」ニ於テ貨物運輸ノ爲輕便鐵道ノ延長方並ニ企業ノ爲ノ物資及材料ヲ其會社所屬ノ船舶ニ依リ輸送方ニ付許可方希望ス。

別紙二、(摘譯)

一、兩代表部委員ノ第二回報告竝ニ十一月八日貴下トノ意見交換ヲ考慮シ、茲ニ一提案ヲ貴下ニ提供ス。

二、本提案ハ覺書中ニ記載セル如ク不可分ノ一體ヲ爲スモノニシテ、其一部ノミノ受容ハ全部ノ拒否ト看做サルヘシ、若シ本提案ヲ討議ノ基礎トセラレント欲スルニ於テハ、總ヘテノ條項ハ互ニ密接ナル關聯性アルモノトシテ總括的ニ同時ニ考慮セラレ度シ。

三、十一月八日ノ會見ニ於テ指摘セル如ク輸入制限品目ニ關スル貴方提案ハ當方ノ提案ト正反對ナルカ故ニ、我方カ互讓妥協ノ精神ヲ以テ貴方ノ提案ヲ受諾スル場合、貴方モ亦同一精神ニ依リテ指導セラル、

コト肝要ナリ。

四、左ニ我方提案ノ具體的説明ヲ試ムヘシ。

(一) 既發制限令ノ目標タル商品ニ關シ「へ」ハ委員會ニ於テ越田ノ提議ニ對シ「サロン」ト晒トハ考慮ノ餘地アルモ、麥酒ト「セメント」ハ既ニ國產充分ナルヲ以テ討議ノ餘地ナキ旨答ヘラレタルカ、右ノ點ハ本會商ノ始メニ於テ日本側カナシタル宣言ヲ遵守シ、右蘭側ノ提案ニ基キ立案セリ。

(二) 重要輸入日本商品ニ關シテハ既ニ貴下ニ於テ之ヲ考慮スルニ異存ナカルヘシト答ヘラレ、委員會ニ於テモ意見ヲ交換シタルカ遂ニ結論ニ到達セサリシモ、茲ニ右重要商品ノ品目ヲ更メテ表記シ提案スル次第ナリ。

(三) 所謂自由競争ニ委セラルル商品ノ實數的基礎ナクシテハ其保留セラルル割合ハ何等保障トナラス仍テ何等カ其解決案ヲ研究スヘキ事ヲ曩ニ提議シ置キタルカ、「へ」委員ハ短カキ期間例ヘハ六ヶ月乃至一ケ年ナラハ其基準實數ヲ定ムルコト不可能ニ非スト述ヘラレタルカ、斯クテハ本協定期間内ニ少クトモ二三回日本品ノ輸入數量ハ變更ヲ免カレス、而モ砂糖買付問題ニ付テハ貴方ニ於テ同様ノ變更ヲ受諾セラレサルヘキヲ以テ、右ノ提案ハ遺憾ナカラ諾シ難シトノ結論ニ到着セリ、故ニ別案ヲ提出スル所以ナルガ、我方ハ一九三三年度ニ比シ二十萬噸丈ケ餘分ノ砂糖ヲ買付クルコトヲ保障セルニ付公平ノ見地ヨリ云ヘハ一九三三年度ニ於ケル日本ヨリ蘭印ヘノ輸出數量ヲ維持セラルヘキモノナルニ拘ラス蘭側代表部ノ希望ヲ考慮シ、日本品ノ輸入量ヲ大量同年度ノ二割減ニ定メ、之ヲ提案セル次第ナリ。

ナリ。

(四) 邦商取扱比率ニ關シ日蘭通商條約ノ精神ヨリスレハ彼等ノ既得權ハ嚴格ニ尊重セラルヘキモノニテ、我方ニ於テ同年ノ比率ヲ維持セサルヲ得ス、然シ其適用セラルヘキ商品ノ總量ニ於テ既ニ減少セルヲ以テ邦商ノ實際取扱量ハ夫レ丈ケ減少スル次第ナリ、此點ハ貴方ニ於テモ満足セラルヘシト思考ス。

(五) 保障條項ニ關シテハ若シ本提案ノ形式カ貴方ニ於テ受諾ニ困難ナリト思考セラルナラハ、本會商中制限令發令ノ場合ニ執リ來レル取扱振ヲ延長實行スルモ一方法ナルヘシ。

(六) 砂糖問題ニ付テハ既ニ日本生産狀況ニ付御話シタルヲ以テ茲ニ再ヒ説明ヲ要セス、只特ニ貴下ノ注意ヲ喚起シ度キハ、日蘭兩國永年ノ親善關係ヲ維持確保セントスル日本ノ切實ナル希望ニ基キ其不必要トスル右商品ノ買付ヲ保障セム事ヲ決意セル點ニ在リ、貴方ノ提案タル年十萬噸以上砂糖ヲ輸出セストノ條件ニ至テハ、日本ハ之ヲ受諾シ得サルモノナル事ヲ茲ニ宣明ス、然シナカラ人間ノ智恵ニテ双方ニ受諾シ得ヘキ何等カノ方式ヲ考ヘ得サルニモ非サルヘシト私カニ考フルモノナリ、從テ砂糖問題ニ最モ痛切ノ利害ヲ有スル蘭側代表部ニ於テ斯カル形式ヲ發見シ、之ヲ我方ノ檢討ニ附スルヲ至當ト信ス。

(七) 既ニ六ヶ月以上互ニ努力シタル日蘭協定ノ爲ノ目的ハ畢竟兩國間ノ諸問題ヲ調整スルニ在リ、只今手交シタル日本ノ提案モ此趣旨ニ於テ作成セラレタルモノニシテ、且ツ以上ノ簡單ナル説明ハ畢竟

スヘテノ誤解ヲ豫メ防止セントスル微意ニ他ナラス。

終リニ臨ミ本使ハ「ヘ」教授カ近ク出發ヤラルルヲ遺憾トスルト同時ニ、本提案事項ニ付越田ハ「ヘ」教授ニ代ハルヘキ人ト何時ニテモ商議スルノ用意アル旨ヲ茲ニ附言ス。

神戸會商ニ於テ和蘭船會社ノ提出セル基本問題ト之ニ纏ハル糾紛

然ニ其翌十二月十二日「アネタ」通信ハ左ノ如キ報道ヲ掲ゲタ。

第一報

日蘭會商ニ就テハ左記ヲ報道シ得。

周知ノ通り和蘭代表部ハ和蘭諸船會社カ神戸ニ於テ交渉シ得ヘキ條件ヲ確定シタリ、故ニ和蘭側ハ會議ニ先立チ日本諸船會社ニ對シ此等ノ先決條件ニ同意スル用意アリヤ否ヤ質シタル處、日本側ハ一致シテ之ヲ拒絕ストノ情報到着セリ、日本側ハ會議シツツ意見ノ一致ニ達セム事ヲ希望ス、然シ乍ラ之カ爲ニ海運問題ノ取扱ハ和蘭政府ニ取テ全テノ魅力ヲ失フ次第ナレハ、和蘭代表部ハ至急會合シテ態度ヲ決スル筈ナルカ、其結果ニ就テハ疑問ノ餘地ナシ。

第二報

尙ホ「アネタ」ノ仄聞スル所ニ依レハ日本側船會社ニ對シテハ神戸會商ノ討議範圍ニ關シ五箇ノ條件提示セラレタリ、此等ノ條件ヲ拒絕スル事ニ依テ日本側船會社ハ日蘭會商ノ繼續カ右條件ノ履行ニ依囑スル事

ヲ知リツツ意識的ニ追加通商條約成立ノ可能性ヲ不可能ナラシメタリ。

尙ホ日本代表部ヨリ提示ノ不満足ナル回答ニ就テ報道シ得ル事ハ、蘭印輸出物產ヲ再輸出ニ充當スヘカラストノ要求ノ不承諾カ其最主要ナル點ヲ成ステウコトナリ。

和蘭代表部ハ會商ノ一時的中止ニ付何等ノ儀式ヲ附帶セシムル意向ナシ。

曩ニ海運問題ノ章末段ニ述ヘタ通り、神戸海運會商ノ冒頭ニ蘭側船會社ガ所謂基本原則ナルモノヲ提出スルノハ決シテ同會商ノ成功ニ資スル所以ニ非ス、否却テ其破綻ヲ招クノミダト越田代表カラ縷々「ヘルデレン」教授ニ説示シタ結果、同教授ハ之ヲ中止サセルコトヲ誓ツタニモ拘ラス、此原則ハ提出セラレ而モ期限附デ先方ハ回答ヲ求メタカラ、日本側船會社カ之ヲ一蹴シタノハ云フ迄モナイ、前記「アネタ」通信ハ右ニ關スル情報ヲ中心トスルモノデアルガ、十三日「ランネフト」代表ハ本件ニ關シ左記要領ノ公文ヲ筆者ニ送ツタ「ジャヴァ」、支那、日本社ハ其神戸ニ在ル代表者ヨリ左記電報ヲ接受セル旨今朝余ニ通告セリ。

「本朝受取レル日本四社ノ返事

會商ニ先ダチ基本原則ヲ受諾スルコトヲ四社一致シテ拒絕ス。日本郵船及南洋郵船ハ基本原則ヲ徹同シ速カニ商議ヲ開始センコトヲ提言ス」

日本船會社ガ何等ノ理由ヲ示サスシテ執レル此期待セサリシ態度ハ、蘭代表部ヲシテ現在ノ方針ニテ通商會商ヲ繼續スルコトヲ不可能ナラシムル事態ヲ作レルコトヲ、余ハ貴下ニ確言スルヲ殆ント不必要ト認ム右ニ關聯シ海運問題ノ満足ナル調整ナクシテ通商協定ノ締結ハ考ヘ得ラレサルコトヲ蘭側カ果次表明セル

コトヲ余ハ指摘セント欲ス。

「バタヴキヤ」會商ノ繼續ハ主トシテ其態度ニ繫屬スルヲ充分承知シナガラ、日本船會社ガ蘭側ノ最モ「モデレート」ヲ要求ヲ頑トシテ拒絕セル事實ニ鑑ミ、蘭代表部ハ海運問題ノ満足ナル解決ニ對スル保障ハ右船會社ニ依リ阻止セラルトノ結論ニ達セサルヲ得ス。

海運問題解決ノ希望ハ著シク減殺セラレ、日本國政府カ其行使ヲ約諾セル韓旋ハ日本船會社ノ態度ヲ左右シ能ハサルコトヲ明カニセリ。日本船會社ハ此行動ニ依リ現在ノ事態及其結果ニ付全責任ヲ負フヘキモトス。

此書翰ハ筆者ガ休養ノ爲山地ニ行ツテ居タ留守中ニ來タモノデ、書翰中ニモ親シク口頭デ話シタカツタガ、不在トノコト故手紙ヲ送ルト加筆シテアル。若シ口頭デノ會談ダツタラ餘リ角ガ立タナカツタカモ知レヌガ此書翰ノ行文ハ全ク沒常識デアル、前掲「アネタ」通信ヲモ綜合シテ判斷スレバ、蘭側ハ「バタヴキヤ」會商打切りノ口實ニ本件ヲ利用セント思フタノカモ知レヌガ、若シ夫レナ餘リニ幼稚ナ考案デアル。何レニセヨ蘭船會社ノ無暴ナ行動ニ依リ神戸會商ハ波瀾ヲ生シタノデ、左ノ如ク餘計ナ電報料ヲ使ハネバナラナクナツタ。

十二月十三日廣田外相發。

一、J社ヨリ提案アリタルニ對シ、我四社ニ於テハ頗ル憤激シ、基礎條件ハ一項タリトモ承認シ難キ旨回答セントセルガ、當局ヨリノ説示ニ基キ郵船及南郵ハ十一日斯カル事項ニ關シテハ會議開催前ニ回答ス

ヘキ筋合ヒニ非サルヲ以テ速ニ會議ヲ開催シ度キ旨回答セルモ、石原及商船ハ同日斯克ノ如キ提案ハ斷シテ承認出來難キ旨夫々J社ニ送りタル趣ナリ。

二、情勢右ノ如クナルニ付蘭側ハ或ハ前記本邦各社ノ回答ヲ楯ニトリ神戸會商ノ開催ヲ拒否シ來タルヤモ知レサル處、斯カル際ハ

(イ) J社提案各項ノ内容ハ會商ニ於テ充分説明ノ上ナラテハ意味判明セサルモノアリ、且ツ會議ニ於テ協議セラルヘキ性質ノモノナルニ拘ラス會議開催ヲ應諾シナカラ突如斯カル最後の要求ヲ爲スハ諒解シ難キ處ニシテ貴電「ヘ」カ豫備會議ニ提出スルコトヲ差控フヘシトサヘ言明シタル處ニモ反シ、蘭側當局ニ於テ當業者ニ對スル指導斡旋ノ努力足ラサルノ左證ナルコト。

(ロ) 然ルニ我政府ニ於テハ專ラ會商成功ノ爲斡旋努力スヘシトノ約束ヲ重シ、三一%「ブールボイント」實施方ニ關スル本邦當業者ノ最後の通告發送ヲ今日迄抑壓シ來タリタルコト等ノ點ヲ越田總領事ヨリ説明ノ上、蘭印側當局ニ於テ今一層ノ斡旋努力ヲ試ミ、速ニ會商ヲ開クコトニ當業者ヲ説得セシムル様申入レラレ度。若シ先方ニ於テ同意セサル時ハ、今次本邦各社ノ回答ハ此種提案ヲ審議スル爲ニコソ民間會商ヲ開クモノナルノ極メテ明白ナル事實ヲ無視セル不合理ナル最後の通牒ニ依ルモノナルニ付、我當業者ニ於テハ會商不成立ニ依ル責任ハJ社ノ負フヘキモノナルコト、又若シ右J社ノ通告カ蘭印政府ノ發案ニ出テタリトセハ全然同政府ノ責任ナリトナスヘキ處、折角神戸會商開催ノ段取り迄漕キ付ケ乍ラ、右ノ如キ喧嘩分レハ双方ニ面白カラサルニ付、我政府ニ於テハ會商ヲ妥結ニ導カ

ントノ一貫シタル方針ニテ努力シ居ル次第ナレハ、蘭印當局ニ於テモ今一應思ヒ直ス様、重ネテ說得ニ努メラレ度シ。

十二月四日廣田外相發。

往電中ニ以下ニ記載ノ趣旨ニ更ニ左記ヲ加ヘラレ、至急蘭側當局ト會議ヲ遂ケラレ、先方ノ回答振リ其際ノ御印象御同電アリタシ。

一、先方ハ日本船會社ハ何等ノ「モーチーヴ」ヲ提示スルコトナクスカル豫期セサル態度ニ依リ通商會議ヲ繼續スルコト殆ト不可能ナリト云フモ、先方提案ハ議題トシテ會議ノ席上論議スヘキ筋合ノモノニシテ、何等討議ヲモナサス今直ニ其諾否ヲ決シ之ヲ以テ會商開否ノ條件タラシムヘキ性質ノモノニ非サルコト、又此種提案ヲ議スル爲準備會ヲ開クコトナク直ニ會商ニ入ルコトハ、會商決定ノ際越田「ヘ」間ニ諒解アル事項ニシテ、蘭印側ノ提案コソ却テ豫期セサリシ處ナリ。

二、而モ先方ハ「モデレート」ナル要求ニ對シ日本當業者ハ頑トシテ拒ムカ如キ態度ヲ執レリト云フモ、日本當業者ハ必スシモ先方提案ノ内容其ノモノヲ云爲セントスルモノニアラス、會商ヲ遂ケントスル矢先キ期限附ノ強迫的通牒ヲ受ケタルコトヲ意外トシ、其ノ仕打チニ反對シ居ル次第ナリ。

三、「日本政府ノ約束セル斡旋ニ依ルモ日本船會社ノ態度ヲ變更セシムルコト能ハサル以上解決ノ希望ハ放棄ノ外ナシ」ト云フモ、斡旋ノ義務ハ獨リ我方ノミ負フヘキニ非ス、蘭印側モ等シク約束シ居リ乍ラ却テ「社」ヲシテ今回ノ如キ通牒ヲ發セシメ、我方當業者ヲ激昂セシメタルコトハ、斡旋スルヨリモ寧ロ

會商ノ間際ニ波瀾ヲ起サシメタルノ怨ミアリテ、或ハ蘭印側カ本問題ニ藉口シテ會商停頓ノ責メヲ當方ニ歸スルモノナリトナセルモノアリトスルモ辯解ノ餘地無カルヘシ。

四、要スルニ會商開催ノコトニ折角協議纏リ居ル以上、双方政府共虛心恒懷ニ當業者ヲシテ速ニ會商ヲ開カシメ、其上ニテ本案ヲ提出セシメ、兩國政府ニ於テ各々斡旋妥結ニ導クコトコソ、會商ノ大局ハ勿論兩國海運業者ノ利益ニ合スルモノト確信ス。

十二月十四日長岡發。

本使數日來不快靜養避暑ノ爲留守中右文書ヲ接受セルカ、同書翰ノ末段ニ「本件ハ親シク口頭ヲ以テ通報スル心組ナリシカ、御不在中ニ付不取敢書面ヲ以テ報導ス、先日ノ日本側提案ニ對スル回答準備出來次第會見シタク、其節本件（海運問題）ニ就テモ亦「ヂスカツス」致スヘク」ト申添ヘ居リ、尙ホ先方ヨリ十七日會見申込アリ旁々、本使ハ神戸會商ニ於ケル蘭側ノ遣口カ越田ノ再三ノ警告ヲ無視シ、且ツ一般會商ノ慣例ニモ反スル次第ヲ詰リ、問題カ寧ロ蘭側提案ノ内容實質ノ如何ヨリハ手續違反ノ問題ニ過キササル處蘭側ニ於テハ日蘭會商ノ中止ノ口實ヲ之ニ求ムルモノニ非サヤト疑問起ルヘシト突込ミ、先方ノ底意ヲ探ル考ナルモ、海運問題ノ機微ナル關係ニ鑑ミ、本使カ本件ニ介入スルノ可否ト共ニ御意見至急承知致度シ。

越田ハ貴電ノ趣旨ヲ含ミ本日「ハルト」又ハ「ホーフストラーテン」ト會見ノ筈ナルカ、既ニ本問題ハ代表部ノ手ヲ離レ神戸ニ於テ兩本國政府ノ監視斡旋ノ下ニ行ハレ居ル關係上、東京ニ於テモ夙ニ蘭公使ヲ直

接ニ御説得相成居ル事ト信スルモ、當地ニ於テハ蘭代表部ハ珍ラシク新聞ヲ指導シテ本件ヲ口實ニ會商中止ヲ宣傳シ居ル等、事態稍重大ナルニ付蘭本國政府ノ蒙ヲ啓ク事肝要ナリト思考ス、爲念。

十二月十五日廣田外相發。

海運問題審議ノ形式ヲ決定シタル場合ト同様ノ趣旨ニ於テ、貴代表ノ御斡旋ヲ願ヒ度シ、十七日「ラ」トノ會見ニ於テハ貴電御來示ノ趣旨ニ往電ノ「ライン」ヲ合セテ可然御接衝アリタシ。

十二月十五日長岡發。

十四日越田ヨリ「ハルト」ニ會見申込ミタル處、議會關係ニテ多忙ノ爲「ウエーヤ」委員代ツテ會見ス、（「イーデンブルグ」同席）要領左ノ通り。

一、越田ヨリ最近神戸民間會商ニ關聯シテ起リタル出來事ニ關シ十三日貴電中二ノ趣旨ヲ敷衍シテ説明シタル後、斯カル不幸ナル出來事ノ發生ヲ避ケムカ爲十一月二十九日「ヘ」トノ會談ノ際、蘭側提案ノ提出方ニ付テモ篤ト談合ヲ遂ケタルモノナル事ヲ告ケ、且ツ十二月十日附海運ニ關スル越田「ヘ」共同報告中ニモ

With a view to avoiding any misunderstanding Japanese Consul General stated, in connection with above explanation by Prof. van Gelderen that Netherlands Government were free to instruct Netherlands Indian Shipping representatives what to Propose at private negotiations, but agenda and procedure of negotiations would necessarily have to be agreed upon by Participating members of both sides

ト記述シタルモノナルコトヲ指摘シタルニ、

二、「ウ」ハ蘭側民間代表カ如何ナル狀況ノ下ニ該案ヲ提出シタルヤニ關シテハ詳報ニ接セサルモ、神戸會商ハ公式ノ國際會議トハ異ナルニ付、正式ニ開會セルヤ否ヤノ如キ形式ハ大シテ重要ナラサルヘク、日本當業者ニ於テ蘭側提出ノ基本案ノ拒絕ハ「バタヴキヤ」會商ノ決裂ヲ意味スルモノナル事ヲ知リツツ爲シタルハ責任重大ナリト反復力説セルニ付、越田ハ日本當業者ニ於テ會商開否ノ條件トシテ期限附強迫の通牒ヲ拒絕シタルハ提案ノ内容其モノノ如何ニ非スシテ其形式及時期ヲ無視セル點ニアリ、如何ナル會議ニ於テモ開會以前ニ斯カル最後の通告ヲナスハ其例ニ乏シク、日本當業者カ斯カル仕打ニ憤慨スルハ當然ナルヘシト辯駁シタルニ、「ウ」ハアノ場合日本側カ拒絕ノ結果ノ重大ナルニ鑑ミ提案ノ撤回若ハ回答ノ留保ヲ申出テタルニ於テハ局面ハ幾分異ナリタルナルヘシト云ヘルニ付、越田ハ斯カル非禮ノ通告ヲ受ケタル以上日本當業者トシテハ直ニ拒絕スルノ外ナカリシコトト信スト答ヘタリ。

三、越田ハ十三日附「ラ」氏ヨリノ書面中ニ會商決裂ノ責ヲ日本當業者ニ歸シ居ルモ、右ハ以テノ外ニテ責ハ全然蘭側ニアリ、本件ニ關シ蘭字新聞モ日本側ノ責任ヲ云々シツツアルカ、若シ斯カル言論ヲ續クルニ於テハ本官ハ日本當業者ノ爲今日迄ノ關係書類ヲ發表シ輿論ノ判斷ヲ待ツ事トスヘシト云ヘルニ、「ウ」ハ蘭側新聞論調ハ夫レ程ニモ非ルニ付右ノ方法ニ出ツル事ハ待タレ度シト答ヘタリ、越田ハ語ヲ繼ギ我代表部内ニ於テハ蘭側今回ノ理不盡ナル仕打ハ會商決裂ノ口實ヲ得ンガ爲ナサレタルヤニ想像スル向モアル位ナリト云ヘルニ、「ウ」ハ斯カル事ハ絶對ニナシト斷言セリ。

四、越田ハ長月日ノ談合ノ結果折角民間會商ノ段取リトナリタル際、斯カル出來事ノ爲頓挫スルハ双方ノ爲遺憾ナルカ、日本政府ニ於テハ今尙ホ百方斡旋ヲ續ケ居ルモノト思考ス、就テハ貴下ヨリ「ラ」氏へ本官トノ會談ノ顛末ヲ徹底スル様報告セラレタシト述ヘタルニ、「ウ」ハ之ヲ快諾スルト共ニ越田ノ用意携帯セル説明覺書（十三日來電中ニ「要領」）及十一月二十九日ノ會談要領英譯ノ寫ヲ得タシト云ヘルニ付之ヲ手交シタル處、本件ニ關シテハ來ル月曜日長岡「ラ」會見ニ於テ言及セラルル事トナルヘシト述ヘタリ。

日本總括提案ニ對スル蘭側回答覺書

斯クノ如ク海運問題デ思ハヌ紛糾ヲ生シタガ、十二月十五日蘭側ハ我方總括提案ニ對スル回答覺書ヲ非公式ニ送ツテ來タ、之ハ若シ當方カラノ注文ガアレハ修正スルノ用意アルコトヲ暗示スルモノデ、會商始マツテ以來ノ和協的態度デハアルガ、此回答覺書ヲ通讀スレハ妥協ノ餘地ハ皆無ダカラ、今更ラ小細工ヲスルノハ國威ヲ傷ケルニ過キヌト考ヘ、一二折合ヒ兼ネル點ハ會談當日之ヲ述ブルコト、シ、覺書ハ其儘ニシテ置イタ。此覺書ハ非常ニ長文ノモノデアルガ、要領ハ左ノ通りデアル。

一、日本代表部カ協定ノ基礎タルヘキ提案ヲ開示セルニ満足スルト共ニ、協定ハ輸出入ヲ一體ト爲サル可ラズトスル日本代表部ノ意見ニ全然同意ナリ。

二、然シ提案ノ實體ニ付テハ頗ル失望セリ、日本首席代表ハ提案ノ一部拒絶ヲ全部ノ拒絶ト看做スト口頭

ニテ述ヘラレタルガ、然ラバ日本ノ提案ハ承諾不可能ナリト云ハサルヲ得ス。

三、日本ノ提案受領直後、J社提案ヲ日本船會社拒絶セリトノ報ニ接セルガ、海運問題不確定ノ事態ハ亦之ヲ考慮ニ置カサル可ラス。

四、日本提案ヲ承諾シ能ハストスル理由左ノ如シ。

(一)、A表ノ主義ニ據ルニ於テハ日本ヨリノ輸入ト蘭印ヨリノ輸出トノ間ニ充分ノ權衡取レズ。

(二)、「パーセンテージ」ノ代リニ數量ヲ定メントスル提案ニハ反對ナリ。

(三)、綿布類ノ移讓制ニ關スルA表附記ハ到底承諾スルヲ得ス。

(四)、蘭側ノ必須條件トスル砂糖再輸出禁止ノ問題ガ全然無視セラレ居ルニ深ク失望ス。

(五)、B表ニ依ル輸入取扱比率ハ「ライセンス」制ノ目的ニ副ハズ。

(六)、C表保障案ノ字句ハ承諾出來ス、尤モ日本首席代表ハ字句修正ノ可能性ヲ口頭ニテ述ヘラレタリ五、更ニ之ヲ説明スレハ、蘭側ノ最モ重キヲ置クハ貿易ノ均衡ノ可能ノ範圍内ニテナリ、之ニ關スル日本側ノ考ガ根本的ニ蘭側ト相違スルヲ遺憾トス。

第一ニD表(二)買付勸奨中ニ「コブラ」「ダマル」等ノ列記ヲ缺クニ失望セリ、右ニ關シ蘭側ハ常ニ其購入數量ノ提示ヲ求メ、日本側ハ蘭印物資ノ輸入増加ヲ計ルヘキコトヲ言明セシニ拘ラス、提案ハ本件講究ノ基礎タリ得ヘキ事項ニ付何等ノ表示ナシ。

第二ニ砂糖買付量頗ル少ナク 貿易均衡ノ改善タルヲ得サルノミナラス、再輸出ニ關シ一言モ觸レ居ラス

日本首席代表ハ口頭ニテ日本ニ外國糖ノ必要ナキコト及再輸出ニ付テハ双方ニ承諾可能ノ「フオーミュラ」ヲ蘭側ヨリ提議セシコトヲ求メラレタルガ、砂糖買付ニ依ルニ非サレバ貿易ノ均衡ハ之ヲ求メ難ク、又不再輸出ノ條件ナクバ砂糖買付ハ無價值ニ終ルヘシ、而シテ之ハ「フオーミュラ」如何ニ依ル問題ニ非スシテ、絶對ニ國外ニ再輸出セサルノ意ナリ、故ニ此必須條件ハ全然拒絕サレシモノト結論セサルヲ得ス六、A表ニ關シ蘭代表部ハ二ツノ異議ヲ有ス。其一ハ日本提案ノ日本品輸入ト蘭印ヨリノ輸出トノ比例ハ承諾出來スト云フニアリ、日本品輸入量ハ一九三三年度ヨリ二割減セラレ居リ、未タ充分トハ云ヘサルモ之ニ付テハ商議ノ餘地アリ得ヘシ、此讓歩ハ畢竟蘭印物資ノ輸出货量如何ニ懸ルモノニシテ、日本側ノ提供スル數量エテハ日本品輸入量ハ餘程低下サレザル可ラス、加之輸入數量ノ保障ニ付テハ元來蘭側ニ異議アルコトヲ指摘ス。其二ハ綿布類ノ移讓性ニ同意シ得サルコトニテ、之ハ既ニ記述セルガ、此提議ハ他國トノ協定ヲ假令不可能ナラズトスルモ困難ナラシムベシ。輸入取扱比率ニ關スル日本案ヲ承諾出來サルハ、之ニ依リ輸入業者ニ對スル「ライセンズ」制度ガ破壞セラル、ニ依ル、然レトモ日蘭間ニ協定成立スル場合、二割五分迄日本輸入商ノ取扱比率ヲ増加スルノ用意アリ。但シ右ハ他ノ條件ガ満足ナル協定ニ達スルヲ前提トス。更ニ蘭印政府ハ日本側ノ要求ニ鑑ミ、輸入商取扱比率ニ關シ歐洲人商業組合ヲ條件トスル規定ヲ廢止スヘシ。

七、以上ハ蘭代表部カ協定ノ基礎トシテ日本案ヲ採用シ得サル主タル理由ヲ簡單ニ開示セルニ過キサレモノナルガ、海運問題ニ關シ日本船會社カ蘭側ノ提案セル五原則ノ討議ヲ一蹴セルハ、海運問題ノ將來ニ付暗雲ヲ投スルモノニシテ、海運協定成立ハ通商協定ノ成立ニ對シ必須條件ヲ爲スモノナレハ、成否ハ一ニ懸ツテ日本船會社ノ態度ニアリ。

八、今日日本ノ提案ト之ニ對スル蘭側ノ回答ヲ再見スルニ、協定ニ達センカ爲過去數月間双方ハ種々ノ讓歩ヲ爲セリ、蘭側ニテハ先ツ其必要トスル制限措置ヲ中止シ、會商長引キタル爲十月一日以降其自由行動權ヲ恢復セルガ、會談ノ結果大ナル自制ヲ爲シ其利益ヲ犠牲トシテ右自由權ノ行使ヲ制限シタリ、更ニ輸出要求問題ニ關シ蘭代表部ハ本件ガ日本ノ感情ヲ害セリトノ單ナル見地ヨリ、具體的討議ニ於ケル日本側ノ厚意ニ信賴シ、右要求ヲ之ニ繫屬セシムルコト、セリ、海運問題ニ付テモ出來得ル限度迄日本國政府ノ考察ニ聽從シタリ、日本側ノ讓歩ニ付テハ日本代表部自ラ之ヲ披露サレタシ。

九、協定ニ達スル爲双方ノ斯クノ如キ讓歩ニ拘ラス、重要諸點ニ關シ未タニ意見ノ甚深ナル差異存在スルニ付、兩代表部ガ此上討議ヲ續クルモ現在ノ所良果ヲ期待シ得スト思考ス、故ニ日本ノ提議ト日本船會社ノ通告（アナウンスメント）トヲ和蘭政府ニ報道シ、商議繼續ニ關スル決ヲ同政府ニ求メントス。若シ和蘭政府ガ肯定的回答ヲ爲スニ於テハ、如何ナル容態ニテ更ニ商議ヲ續ケルコトガ協定成立ノ爲最モ有効ナリヤニ關シ、同政府ヨリ直接日本國政府ニ通告スヘシ。

會商繰延宣言ニ關スル經緯

十二月十七日豫定ノ如ク筆者ハ「ランネフト」代表ト會見シタ、其會談要領左ノ通り。

一、「ラ」ヨリ正式ニ先方覺書ヲ手交スル容態ヲナセルニ付、本使ヨリ右ヲ受取ルニ先チ去ル土曜日貴方代表部カ非公式ニ當方ニ交付セラレシ覺書ニ關シ重要ナル「リマーク」ヲ爲シ度シ、右ハ同覺書ノ最終ノ項ニ關スル事ニテ、同項ノ起草者ハ或ハ其重要性ニ想到セラレズニ書キ下サレタルモノカトモ存ズルガ同項ハ我カ代表部ノ名譽上到底之ヲ受諾シ得サルモノナリト云ヘルニ、「ラ」ハ何ガ斯程ニ貴方ノ神經ヲ刺戟セルヤト云フガ如キ面持ニテ怪訝ナル顔ヲシ居タリ、仍テ本使ハ若シ之丈ケニテハ貴方ニテ了解出來ズバ當方トシテハ希望セサルモ更ニ之ヲ附言スヘシト云ヘルニ、「ラ」ハ希望ノ容態ヲナセルニ付、本使ヨリ同項ハ我代表部ノ存在ヲ全然無視スルモノニテ、越田代表及本使ハ日本ノ全權委員トシテ會商ニ關スル全般ノ權限ヲ有シ居ルコトハ御承知ノ通ナルカ、同項ハ貴方ノ一方の意思ニテ蘭國政府カ今後ノ處置ニ付日本政府ト直接取極ムル旨通告セルモノニテ、換言スレハ最早日本ノ代表部ニ用事ハナシ早々御歸リ下サイト云フ事トナル、斯クノ如キハ我代表部ノ名譽ト權威ニ鑑ミ到底之ヲ受諾スルコトヲ得サルニ付同項ヲ削除セラル、事至當ナリト云ヘルニ、「ラ」ハ頗ル驚キ且ツ意外ノ面持ニテ「イーデンブルグ」ト顔ヲ見合セタル後、同項ハ斯クノ如キ意思ニテ起稿セラレタルモノニ非ス、自分等ハ毛頭日本代表部ヲ輕侮スル意思ヲ有セスト辯明シタル後、素直ニ同項削除ニ異議ナキ旨ヲ答ヘ、之ニテ本件ハ解決セリ。

二、本使ヨリ貴方ノ覺書ニ對スル回答ハ何レ文書ヲ以テ之ヲナスヘキガ、本使ハ同覺書ヲ一讀シテ甚タ失望セリ、夫レハ右覺書ハ我覺書ニ對スル單ナル批評ニ止マリ、比率ノ問題ヲ除キテハ一ノ具體的對案ナ

シ、當方ニテハ互讓ノ精神ニ基キテ作成セル具體的提案ヲナシタルコトナレバ、貴方ニテモ亦右ニ對シ具體的對案ヲ送ラル、事ト豫期シ居タルニ、貴方覺書ハ單ニ抽象的議論ニ止マレルガ、其結論トシテ

Such deep differences of opinion should still remain on important points ト述ベ、右ヲ基礎トシテ At pre-

sent no further good can be expected to come ナル「コンヴェクシオン」ヲ貴代表部ハ得ラレシト云フ事

ヲ推論セラレ居ルカ、斯クノ如キ決定ニ如何ニシテ貴方カ到達セラレタリヤト云フ根本ニ付説明ナシ、本使カ貴方覺書ヲ通覽シテ得タル印象ハ之ニ反シ今後未タ交渉ノ餘地充分アルカ如ク思ハル、カ、此機會ニ於テ本使ハ和蘭代表部ハ比率ニ割ヲ二割五分ニ引上クル以外、從來ノ提案ヲ固執シ何等互讓ノ餘地ナシトノ見解ヲ持セラル、ヤ、換言スレハ我カ互讓案ニ對シ蘭側ハ單ニ之ヲ一蹴シ新案ヲ考慮スルヲ欲セサルヤ、右ニ對シ「イエース」又ハ「ノー」ノ明確ナル回答ヲ得度シト云ヘルニ、「ラ」ハ若シ「イエース」又ハ「ノー」ノ答ヲ求メラル、ニ於テハ蘭代表部トシテハ「ノート」ト答フルノ外ナキガ、本件ニ關シテハ日本側提案及之ニ對スル蘭側回答ヲ本國政府ニ送り其考慮ヲ求メツ、アリ、自分トシテハ必スシモ絶望シタル譯ニハ非サルモ、二ツノ重大問題横ハレリ、即チ（一）砂糖、（二）海運問題ナリト述ヘタル後、貴方覺書中輸入ニ關スル新要求ニ付和蘭政府ハ研究スルヲ要スト云ヘルニ付、本使ハ新シキ提案ト云ハル、ガ右ハ何ナリヤト問ヘルニ、覺書第二頁ニ掲ケアル殆ント全部ナリト云ヘルニ付、本使ハ之ハ異ナルコトヲ承ルモノナリ、自分ノ考ニテハ右ノ内綿布類移讓性ニ關スル第三項ハ如何ニモ新提議ナルガ、其他ハ決シテ新ナルモノニ非ス、而シテ第三項ニ就テハ充分協議ノ餘地存スルコト、思ハル

ト述ヘシニ、「ラ」ハ言フ左右ニ托シ、主ナル問題ハ砂糖殊ニ其再輸出條件ナルカ、此他ニモ蘭印ノ他物產ノ買付問題アリト云ヘルニ付、本使ハ再輸出ノ件ニ關シ貴方ニテハ絶對的態度ヲトラレ居ルモ、砂糖ヲ買付クルハ日本商人ニテ之ヲ賣込ムモノハ矢張り蘭印ノ商人ナリ、此賣主ト買主トノ間ニ賣買ノ際其必要ト認ムル條件ヲ取極ムレハ右ニテ充分ナル事ニテ、斯クノ如キハ越ヘ得サル難事ニハ非サルヘク、又其他ノ物資購入ニ付若シ貴方ニテ御希望トアラハ早速當業者間ニ話ヲ進メシムレハ簡單トハ云ハサルモ何等カノ解決ニ到達シ得ル事ト思ハルト述ヘタル處、「ラ」ハ何レニセヨ今ノ事態ニテハ双方ノ歩ミ寄リ容易ナラス、假スニ時ヲ以テセバ例ヘハ六ヶ月モ經過スレハ自ラ双方ノ意見モ成熟スベク、必ズシモ解決出來ヌ事モアルマジク、自分ハ決シテ悲觀シ居ラスト述ヘタル後、

三、船舶問題ニ入り「ラ」ハクドクドシク繰返セルガ本使ヨリ神戸ニ於ケルJ社ノ處置ハ甚タ不可解ニシテ又右ニ關スル貴方ノ書翰モ諒解ニ苦シム所ナルカ、右ハ去ル金曜日越田「ウエーヤー」會見ノ際越田ヨリノ詳細陳述ニヨリ萬事釋明セラレシ事ト思ヒ居タルニ、貴方覺書中ニモ尙ホ Japanese shipping companies have refused to discuss the five points ト掲ケアリ、今尙ホ誤解ヲ續ケラレ居ルヲ見テ頗ル遺憾ニ感ズル旨ヲ指摘シ、同時ニ覺書ノ末段ニ於テ The announcement of the Japanese shipping Companies カ會商ノ運命ヲ決スヘキ一元素トシテ掲ケアルコトハ如何ニモ了解シ難キ所ナリ、J社入電トシテ貴方書翰中ニモ掲ケアル如ク日本ノ船會社ガ所謂基本五ヶ條ヲ拒絕セルニハ非スシテ、右ノ檢討ハ會商ニ於テ之ヲナスベク其以前ニ斯クノ如キ問題ノ審議ニ入ルヲ拒絕セル迄ナレハ單ニ手續上ノ問題ニ過キズ、

之ヲ如何ニモ問題ノ根本ヲ拒絕セルガ如キ態容ニテ論議セラレ居ルハ誤解モ亦甚シト述ヘ、當方ヨリ微細ニ説明シ先方亦辯明スル所アリタルカ、「ラ」ハJ社ノ執リタル手續カ頗ル拙劣ナルコトヲ認ムルト同時ニ、自分方ニテモ神戸會商開始ノ爲充分ノ斡旋ヲナスベケレバ日本政府ニ於テモ同様ノ斡旋アラントヲ希望ス、尤モ右ハ蘭代表部限りノ意見ニシテ蘭國政府カ如何ナル意見ヲ有スルヤハ照會ノ上ナラデハ分ラサルガ、自分ハ此「ライン」ニテ進ミ度キニ付日本政府ニモ可然申入レラレ度ク、尙ホ「オブサーヴァー」ヲ出ス事ハ見合ハス事トセリト述ヘタル故、本使之ヲ快諾セリ、「ラ」ハ更ニ神戸會商愈々開始セラレタル場合J社ヨリ基本條項ヲ申入ル、場合は亦一蹴セラル、コトナキヤヲ惧ルト述ヘシニ付、本使ハ斯クノ如キコトハ會議ニ上程ノ上ナラデハ分ラサル事ナガラ、日本船會社トシテモ理由ナク全然ニ一蹴スルカ如キコトハナカルヘシト考フト云ヘルニ、「ラ」ハ本使ヨリ此保障ヲ聞キ非常ニ安心セリト云ヘルニ付、本使ハ右ハ何等保障セル次第ニハ非ス單ニ協議ノ上ニ非サレハ何事モ分ラス又協議トハ無理不盡ニ他方ノ云分ヲ蹴ネツケル意味ニ非サルコトヲ申述ヘシ迄ナリト答ヘ置ケリ。

四、「ラ」ヨリ就テハ當地ニ於ケル會商ト神戸會商トノ關係ナルガ、右ノ通り兩國政府ノ好意的斡旋ニヨリ神戸會商カ進行スル場合、其模様ヲ或ル程度迄見極メザルニ於テハ當地ノ會商ヲ此上繼續スルモ或ハ無意味トナルヲ惧ル、之ハ會商ノ當初ヨリ蘭側ノ主張セル如ク海運問題ト輸出入問題ハ自分方トシテ分離シ得サル所ナレハ、神戸會商ノ見据エ付ク迄「バタヴキヤ」會商ハ之ヲ延期スルコト、シ度ク、尤モ之ハ「バタヴキヤ」會商延期ニ關スル一半面ノ理由ヲ述ヘシニ過キスシテ、「バタヴキヤ」會商延期ノ真

ノ理由ハ砂糖問題其他ニ關スル難關ヲ目下ノ所打破シ得ル名案双方ニ存在セサルニ依ルト述ヘシニ付、本使ヨリ神戸會商ノ結果カ成功的ナル時ハ「バタヴキヤ」會商ヲ繼續スルノ意思アリヤト問ヘルニ「ラ」ハ自分トシテハ可能ト信スルモ之ニ對シ本國政府カ如何ナル意向ヲ有スヘキヤハ知ラス、從テ之カ決定ハ本國政府ニ委スルノ他ナカルヘシト云ヘリ、本使ヨリ「バタヴキヤ」會商幸ニ再開ノ場合、今後ノ問題ハ計數其他純技術的事項ナルニ付、外交的商議ニヨリテ之ヲ解決セントスルハ事情ニ適セサルヘク、從テ海牙ニテ再開スルモ武富公使ニハ困難ナルヘシト云ヘルニ、「ラ」ハ自分モ過般「ヘ」ヨリ海牙說ヲ聞キタル時同様ノ意見ヲ述ヘシ事アルガ、「ヘ」ガ越田氏ニ述ヘシ事ハ總ベテ同人限りノ事ニテ自分ハ毛頭與リ知ラス、ト幾分不滿ノ意ヲ洩ラシ居タリ、本使ハ會商開催地ニ付蘭國政府ハ當初海牙ヲ又日本政府ハ東京ヲ主張セル經緯アリ、結局双方妥協シテ當地ニ開催セラル、コト、ナリタルモノナレハ、再開ノ場合ニハ矢張り當「バタヴキヤ」コソ適當ナルヘシト云ヘルニ、「ラ」ハ同感ノ意ヲ表ハスト同時ニ、尤モ其場合ノ代表ハ自分ニハアルマジク、此レ丈苦キ經驗ヲ經バ自分トシテハ充分ナリト云ヒ居タリ、本使モ亦六ヶ月後ニ再ヒ瓜哇ニ來ルコトハ請ケ合ハスト云ヒタル後、然ラハ大凡ソ双方ノ意見モ判明セルニ付今後ノ處理ニ關シ考案ヲ立ツル事トシ度シト申入レタル處、「ラ」ハ其案ハ當方ニ用意シアリトテ別紙ヲ示セルニ付本使ハ此第二項ハ餘リ好マシカラス、幸ヒ先刻ノ御意見ニテ「ヒント」ヲ得タルニ付之ヲ取入ル、事トシテハ如何トテ第二項ニ代ル提案ヲ起草セル處、「ラ」モ之ニ異存ナク、双方速ニ本國ニ請訓スルコトニ打合ハセ本日ノ會談ヲ終レリ。

別紙

兩代表部首席ハ「バタヴキヤ」會商ガ双方ノ見解ヲ闡明シ、或種誤解ヲ消散スルコトニ役立チタルモ、未タ終局の結果ニ達セサルコトヲ均シク承認ス。

兩代表部首席ハ遺憾ナガラ會商ノ繼續ハ目下其効ナシトスルニ一致セルガ、此決定ハ日蘭兩國間ニ存在スル良好關係ヲ何等障害スルモノニアラズトノ固キ確信ヲ有ス。

第二項長岡案

兩國船會社間ノ會商カ神戸ニ於テ將サニ開カレントスルニ鑑ミ、兩代表部ハ該會商ノ進行ヲ注視スルニ一致セリ。

仍テ「バタヴキヤ」會商ハ終局的解決ヲ提議スル爲事態ノ闡明スル迄、其仕事ヲ繰延ブ (renvoie ses travaux)。

筆者ハ此「フオーミュラ」ガ東京ヲ満足サセ得ルモノト自信シ、殊ニ海運會商ノ成行ヲ當方見守ルコトヲ編入レタルコトハ、先方ガ其相對性ヲ強調シテ居ル實體ヲ背景トシテ繰延ヘノ理由ヲ作り、決裂又ハ中止ニ非ストノ外觀ヲ整ヘタ極メテ妙案テアルト考ヘタカラ、早速十七日左ノ電報ヲ廣田外相ニ送ツタ。

別電ハ當方ヨリ種々説得ノ上漸ク右案ニテ本國政府ニ請訓スル事ニ同意セシメタル次第ナルカ、蘭側ハ會見前ヨリ會商打切ノ決意ヲ以テ豫メ宣言案文迄モ用意シ居リ、其第二項トシテハ(前出ニ付略之)ト起案シ居リタルカ、右ノ打切ト解セラルル文句ハ之ヲ削除セシメ、累次貴電ノ御趣旨ヲ體シ飽ク迄會商繼續ノ

形式ヲ保存シ、或ハ神戸海運會商ト本會商ト密接ナル聯關アル事ヲ仄カスノ嫌ハアレトモ、「右民間會商ノ進行ヲ注視スルニ一致セリ」ト輕ク蘭側ノ主張ヲ受入レ、第三項ニ於テハ其ノ間尙ホ兩代表部ハ存在ヲ繼續スルノミナラス其事務ヲモ續行スル事ヲ明白ニシタルモノニシテ、我方ニ於テモ代表部ノ組織ハ縮少スルトモ依然貴大臣御趣旨ノ通り越田姉齒居殘リテ何時ニテモ交渉ヲ繼續シ得ル様取計ヒ置キタリ、右ニテ貴大臣ノ御内意モ充分達成シ、内外ニ對シテモ決裂又ハ中止等ヨリ起ル非難モ免レ得ヘク、將又會商ノ眞ノ再開迄ノ措置ニ就テモ蘭側ハ會商妥結不可能ヲ理由トシテ勝手ナル措置殊ニ從來會商妥結迄ノ便法トシテ定メタル暫定措置ヲモ變更スルノ口實ヲ與ヘサル様成シ得タリト信ス、右ノ次第ニテ豫メ請訓ノ暇ナク本日會談先方ノ提案ヲ機會ニ修正意見ヲ押付ケ納得セシメタルモノナリ、以上本使ノ微衷御諒察ノ上、至急右宣言案御承認ノ回電ヲ乞フ。

然ルニ右案文ニ付十七日夕刻先方ヨリ修正ヲ申込ミ來ツタガ、當方デハ双方首席全權ノ同意ニ係ル案文ナリトシテ既ニ帝國政府ニ發電濟ナル故、其變更ハ甚タ迷惑ナリト答ヘタ處、「ラ」ハ何卒明十八日朝一寸ニテモ差支ナキニ付面會ヲ承諾セラレ度シト頻リニ哀願セル故、筆者之ヲ諾シ、左ノ如キ會談ヲシタ。

一、「ラ」ハ斯クノ如キ事ヲ申出ツルハ自分トシテ甚タ心苦シキ次第ナルガ、實ハ第二項ニ付代表部員間ニ異論アリ、自分ノ代表部ハ甚タシク「デモクラチック」ナレバ全ク遣リ切レズ、殊ニ總督府ニ於テ第二項ノ儘ニテハ本國政府ニ取次カスト云ヒ、之ハ多分總督ノ意見ナルヘシト考フルカ、斯クノ如キ二重制ノ不便ヲ我々ハツクヅク體驗セシメラル、次第ナレハ、其邊ヨク御諒解ノ上何トカ色ヨキ御返事ニ預リタシ

ト云ヘリ。(附記、蘭代表部ノ内外ニ舅、小舅ノ多キコトハ曩ニ之ヲ記シタガ、此告白ハ其實際ヲ赤裸々ニ物語ルモノデアル、本件ニ關シ九月十五日「ランネフト」代表ガ翌日カラ總督代理ヲスルニ付其挨拶ノ爲來訪セル際、蘭代表部ニ對スル本國政府ヨリノ訓令其他ハ悉ク總督府ヲ經由シ、「ラ」ガ本國政府ト直接ニ通信シタノハ過日電話デ話シタ時丈ケダト語り、頗ル不滿ノ色ヲ表ハシタノモ亦同一消息ノ反影ニ外ナラヌ)。

二、意見交換ノ末右ノ異議ハ主トシテ當方案文ノ字句ヲ先方ガ寫シ誤リシニ基因スルコト判明セルガ、我方モ妥協シ第二項ヲ左ノ如ク改メ、第三項「提議スル爲」ヲ「準備スル爲」ニ修正スルニ同意ス。

第二項

兩代表部ハ兩國船會社間ノ神戸會商ノ進行ヲ注視スルニ一致セリ。

本使ヨリ我方ハ直ニ之ヲ修正電報トシテ東京ニ送ルベキガ、萬一又々總督等ニ於テ異論出テ更ニ之ヲ變更セネバナラヌ様ナ事態ヲ生スルニ於テハ甚タ迷惑スルニ付早速總督府ト打合セノ上其結果ノ通報ヲ得度ク其上ニテ發電ノコトニスヘシト打合セタリ。

三、本使ヨリ右聲明書ニ對スル回電ハ兩三日中ニ到着スル事ト思フシ、又其回答ハ肯定的ナルヘシト信スルガ、双方ノ政府ニ於テ若シ修正ヲ提議スル場合ニハ己ムヲ得サル事ニテ、其節ハ又持寄り相談スルノ外ナカルヘキモ、昨日ノ「テキスト」ハ本使折角苦心ノ作ナレハ何等修正セヌ様要求シ置ケルニ付東京ヨリ修正意見モ多分出マジト思ハルト云ヘルニ、「ラ」ハ當惑ノ色ヲ示シ居タリ、次テ本使ハ斯ク返電到達

ノ上ハ會商ノ仕事ヲ再ヒ始ムル迄ノ中間ニ於テ、若シ蘭印政府カ次々ト日本ノ商業的利益ニ關スル各種法令ヲ該利益ヲ無視シテ發布スルカ如キコトアラバ兩國永年ノ親善關係ハ著シク阻害セラル、ニ至ルヘシ、仍テ此期間中去ル十月一日以降蘭印政府カ各種制限令公布ノ自由ヲ再獲センコトヲ申出デシ際、九月下旬貴下ト一同、其後「ハルト」代理セルニ付主トシテ同氏ト取極メタル「ライン」ニ從ヒ、發令ノ少クモ一週間前ニ當方ニ之ヲ内告シ、必要ナル「サゼツション」ヲ爲ス機會ヲ與フル様ニスル事機宜ニ適シタル方法ト思考スト云ヘルニ、「ラ」ハ「イーデンブルグ」ト暫ラク相談ノ上自分トシテハ毛頭異議ナク、此「ライン」ニテ進ムコトガ双方ヲ満足セシムル唯一ノ方法ナレハ寧ロ自分ヨリ提議シタク考ヘ居タル所ナリ、然シ一應總督府ニ聞合セタル上ニテ確答致スヘシ、此取極ハ無論極秘ニセラルヘキモノナリト云ヘルニ付本使ハ勿論ナリ、民間ニハ全然之ヲ知ラシメサルモ政府ニ於テ承知シ居ル以上人心ヲ指導スル際大ナル便宜アルヘシト答ヘ置ケリ。

然ルニ筆者ノ自信ト期待ハ全ク裏切ラレタ。其經緯ハ左記往復電報ガ能ク之ヲ闡明スル。

十二月十八日廣田外相發。

一、宣言案ニ付貴電御來示ノ處迄潛キ付ケラレタル御努力ハ本大臣ノ頗ル多トスル所ナリ、大體ノ建前ハ貴電程度ニテ結構ト存スルモ、宣言案(電文ニ二、三不明ノ點モアリ)ノ内容ニ付左ノ通り變改方今一應御努力相成様致度シ。

(イ) 第二項ニ付テハ御來示通り神戸會商ト本會商トノ聯關ヲ仄カスノ嫌アルノミナラス、蘭側モ本項

ニ付苦シキ立場ニアル趣ナルニ付テハ、第二項ハ寧ロ全部削除セラレ度シ。

(ロ) 從テ第三項ヲ第二項トシ、第一項トノ續キ合ヒヲ御考慮ノ上、例ヘハ左記ノ如キ文句ニ改メラレ度シ。

「右ノ如キ事情故兩代表部ハ終局的解決ヲ準備スル爲事態ノ闡明スル迄「バタヅキヤ」會商ガ其仕事ヲ繼續スヘキコトヲ宣言ス」

(ハ) 若シ先方ニ於テ第二項ノ存置ヲ固執スルニ於テハ、右(ロ)ノ案ヲ第二項トシ、貴電案ヲ第三項ニ廻ハス様致度シ。

二、尙ホ貴電後段先方カ勝手ナル措置ヲ執ラサル様御配慮アリタル點ニ關シ、藪蛇トナラサル限り、出來得レハ後日ノ爲何カノ形ニ於テ其點明確ナラシメ置キ度ク、右重ネテ御配慮アリタシ。

十二月十九日長岡發。

當方トシテハ今更再修正ヲ要求スル事ハ却テ蘭側内部ノ打切派ヲシテ其最初ノ提案ニ立戻ルノ機會口實ヲ與フルノ危險アリ、尤モ修正カ帝國政府ノ根本方針ヲ阻害スル等ノ重大理由アラハ格別、結局貴電(ハ)ノ如ク單ナル項目ノ配列變更ニ過キサルモノナラハ、此ノ際ハ枉ケテ當方苦心ノ結果漸ク先方ニ應諾セシメタル申請案至急御承認ヲ獲タク、重ネテ回訓ヲ乞フ。

尙貴電二、ノ問題ハ行違ヘル往電ニテ御諒承ヲ乞フ。

十二月十九日木村顧問發來栖局長宛。

本省事務局ト代表部首腦間ニ又々意思疎隔ナキヤヲ恐レ卒直ニ申進ス、重光次官ニモ御内示ヲ乞フ。

一、最近ノ報告電報ハ電信料節約ノ趣旨ニテ結論ヲ明白ニシ、其間ノ曲折ハ省略セルモ、幹部諸公ニハ徹底スルモノトシテ、成ルヘク簡單ニシ、重要ナル請訓問題ノ起ル毎ニ實ハ小生起草シ、高等政策上ヨリ御詮議ヲ煩ハス様ニ、當方ノ苦心並ニ情勢ヲモ略述スルコト、致シタル次第ナルガ、今回休會宣言案確定迄ノ曲折、説明不十分ナリシ爲ニヤ、貴電ノ如キ修正訓電ニ接シ、一同意外ノ感ニ打タレ、再ヒ本省ニテハ當方電信精讀ノ上ノ訓令ナリヤニ疑問ヲ抱クニ至レリ。

二、貴電一、ノ（イ）第二項削除要求ノ理由ニ關シ、海運問題ト會商トノ關聯ニ就テハ、蘭側ハ最初ヨリ不可離ヲ主張シ、決裂ニ至ラントセシヲ漸ク慰撫シ、今回モ亦折角神戸會商ノ遣リ直シニ漸ク納得セシメタル程ニテ、日本ノ關スル限りハ兩會商ハ形式上分離セシメタルモ、内實關聯性アルコトハ默認ノ外ナカリシニ非サト愚考ス、此曖昧ナル關係ニ對シ蘭側ニテハ日本ノ「ベテン」ニ懸レリト迄極言スル者アリ從ツテ「聯關アルコトヲ仄カスノ嫌アレドモ」トハ當方ヨリノ辯明的理由トシテ申添ヘタル迄ニテ、實ハ先方ノ會商決裂宣言案文ヲ引込メシムル爲、而シテ會商繼續ヲ否認シ得サル立前ニ先方ヲ引入ル、爲、恰モ先方ノ重要主張ヲ輕ク受メタル形ニテ、退引ナラヌ立場ニ置ク爲、態ト海運問題ヲ持出シタル苦心ノ結果ナリ、若シ夫レ「蘭側モ本項ニ付苦シキ立場ニ在ル趣」トノ他ノ修正理由ニ至テハ了解シ難シ、蘭側ノ打切派ハ總督ニ進言シテ草案ニ難癖ヲ附ケ、「ラ」ヲ苦境ニ陷レントシテ海運問題ト會商トノ關係ヲ一層明確強固ニ主張シ、往電「神戸會商ノ進行ヲ注視シ」ノ如キモ、先方ノ提案ハ「其結果ヲ俟チ」ト強硬ニ

主張セシヲ修正シタル次第ニテ、彼等ハ我方カ應諾セサレハ元ニ復リ決裂宣言トセムトスル魂膽ナリシガ、當方ニ於テ此内情ニ感付キ一應ハ修正ヲ拒絕シナガラ、前記ノ如ク輕微ナル文句ノ修正ニテ「ラ」ノ苦境ヲ救フト共ニ、會商ノ形式上及事實上維持ヲ主眼トスル原案支持ニ努力シタル双方ノ苦心懸引ノ結晶ナリ、蘭側カ第二項ニ付反對又ハ苦シキ立場ニアリ削除ヲ欲スト御考ニナル事由ハ何等カ別ニ情報ニテモアルニヤ。

三、（ハ）ノ御方針カ結局ノ落ナリトセハ、以上ノ曲折並ニ從來ノ報告ニ鑑ミ、今更ラ我代表ニ於テ修正ヲ提議シ得ルヤ、其立場モ御同情アリタク、又蘭側ニ於テ或ハ政府ノ訓令ニ基キ修正ヲ申入ル、コトナキヤ不明ナルモ、我方ヨリ強イテ修正ヲ提議セハ折角押ヘタル打切派ヲシテ再修正又ハ自己ノ原案復活ニ躍進スル機會ヲ捉ヘシムル結果トナルハ明白ナリ、斯クノ如キハ果シテ外相ノ御方針ニ適合スルヤ疑ナキ能ハス、結局角ヲ矯メテ牛ヲ殺スノ結果トナラサルヤ憂慮ニ堪ヘス、此際大所ニ立チテ情勢ヲ達觀シ、機ヲ逸セス我代表ノ協定案ヲ承認アラムコトヲ切望ス。妄言多罪。

十二月二十日長岡發

本二十日朝蘭側ヨリ蘭本國政府ハ宣言案全部ニ付承認セル旨内報シ越セリ。

十二月二十日廣田外相發。

十九日發貴電ニ關シ當方トシテハ飽迄十七日發貴電ノ趣旨ヲ徹底シ、假令我代表部ノ規模ハ縮少スルモ會商自體ハ之ヲ繼續スルノ建前ヲ明瞭ニ致度シ、往電宣言案修正方申進メタル次第ノ處本日貴電ノ次第二鑑

ミ、此場合方案ヲ申入レルコトハ貴代表ノ立場ヲモ顧念シ之ヲ見合ハスコト致スヘキニ付、此際ハ貴代表ニ於テ總ヘテノ事態報告ノ爲一旦歸國スヘク、之カ爲何等宣言等ヲ行ハサル事トシ度キ旨、先方ト懇談セラルコトト致度シ。

二、右ニモ拘ラス蘭側ニ於テ此ノ際強イテ宣言案ノ發布ヲ主張スルニ於テハ、海運ノ點ハ重ネテ遞信省側ノ切ナル希望アリ、該項削除方御努力願ヒ度キハ山々ナルモ、事情ニ依テハ之ヲ存置スルコト己ムヲ得サルヘク、何レノ場合ニ於テモ宣言案第三項 (renvoie) ハ (poursuit) ト訂正方提言セラレ、其達成ニ御盡力相成結果御回電有度シ。

十二月二十日來栖局長發木村顧問宛

本日本大臣往電ニ關シ右ハ大臣トモ種々熟議ヲ遂ケタル結果ニシテ、大臣トシテハ十八日ノ閣議ニ於テモ會商ハ總領事ヲシテナリトモ繼續セシムヘシト報告セラレタル經緯アル外、各方面ノ關係ヲ慎重ニ考慮セラレ、「延期」(renvoie) ニハ飽迄同意セラレサル次第ナリ。

我々モ決裂又ハ打切リト云フ表言ガ面白クナイト思フタカラ、既ニ十一月三十一日ノ會談ノ時「ラ」ガ「終了」ナル文字ヲ使用シタノニ對シ、筆者ヨリ「中止」ノ文字代用ヲ勸奨シタノデアルガ、其後東京トノ往復電報ニ依リ「中止」デモ未ダ強過キルト感シタノデ、種々考ヘタ結果「ランヴオアイエー」ト云フ字句ヲ使ツタノデアルガ、本省デ之ヲ「延期」ト簡單ニ譯シテシマツタノハ筆者トシテ頗ル物足りヌ心地ガスル、ソハ兎モ角クトシテ本省ノ注文通り「繼續」(プールスイーヴル)ノ字ヲ置キ換ユルコトハ餘リニ事態ニ即セヌ

ノミナラス、蘭側テ之ヲ受入レルトモ思ハレヌカラ、寧ロ端的ニ宣言ヲ出サヌ事ニスル方ガ簡單且ツ萬全デアルト考ヘ、十二月二十一日「ラ」ト會見シテ左ノ如キ會談ヲシタ。

一、本使ヨリ東京ヨリ訓電ニ接セルカ同地ニ於テハ事態明確ヲ缺クモノアルカ如ク口頭ニテ詳細ノ報告ヲナス爲至急歸朝セヨトノ電報ニ接セリ、就テハカノ宣言案ハ之ヲ發表スルコトナク又何等ノ「コンミューケ」モ出サス此ノ儘引揚クル事トシ度ク、本使ノ不在中ハ次席代表タル越田總領事カ日本代表部ヲ主宰スヘシト述ヘタルニ、「ラ」ハ待チ設ケ居リシ如キ面持ニテ夫ハ已ムヲ得ヌ事ナリ、貴方ニテ署名セスト云ハルレバ當方丈ノ署名ニテハ何ニモナラス貴意ニ從フノ外ナカルヘク自分トシテハ異存ナシ、然シ該宣言案ハ蘭國政府ヨリ承認シ來レル經緯モアルニ付、本國政府ニ敬意ヲ表スル爲一應其意向ヲ聞キ度ク、公式ノ返事ハ明日迄待タレ度シト答ヘタル後、和蘭代表部ハ今後共存續スルガ、最早自分ハ全權ヲ帶ヒテ日本代表部ト協議スル權限ヲ有セス、之ハ明確ナル蘭國政府ノ訓令ニ依ルモノナルニ付、蘭國政府カ新ナル訓令ヲ寄越サル、限り自分トシテハ何事モ只政府ニ取次ク丈ノ事シカ出來ズ、若シ越田氏カ何等用事アラバ、「ウエーヤー」ニ申入レラレテ差支ナキモ、彼亦何等ノ權限モ有セサル事ヲ篤ト御承知置アリ度シ、尙ホ獨リ言ノ如ク廣田外相ノ閣議報告ニ關スル新聞電報ヲ讀ミタルカ、其様ニ運ヒ得ルモノナラバ至極結構ナリト極メテ揶揄的口調ニテ洩ラシ居タリ、思フニ「アネタ」通信ヲ見テ本日ノ當方申出ヲ大凡ソ豫測シ居タルモノナルヘシ。

註、此通信ノ要領ハ左ノ通りテアル。

「長岡代表ハ或ハ引揚ケル様ナコトガアルカモ知レヌガ、之ハ決シテ會商ノ打切りヲ意味スルモノデハナク、長岡代表ガ引揚ゲルトナレバ、越田總領事ガ首席代表トシテ一切ノ交渉ニ當リ、何ントカ局面打開ノ方法ヲ見出ス様努力サセル積リデ、我方トシテハ會商ノ圓滿成立ヲ飽迄希望シテ居ル。」

二、「ラ」ヨリ前回御話ノ所謂紳士協約ニ關シ自分トシテハ此方法ヲ採用スルコト事宜ニ適スト今尙ホ思考シ居ルモ、未タ政府ヨリ確答ニ接セズ、又反對意見モ相當アルニ付暫ラク回答ヲ待タレ度シ、今朝ノ磐城無電ハ保障ニ關シ通報シ居ルカ、斯クノ如キ廣範ノ約束ヲスル意思モナク、（註、此「アネタ」通信ハ蘭側ニテ新聞掲載ヲ差止メタガ要領ハ「バタヴキヤ」會商ハ間モナク中止セラルベキガ、中止中蘭國政府ハ日本品ノ輸入ニ對シ新ナル制限ヲ課セストノ條件ナリト云フニ在ル）、又「コンミット」セル覺エモナシト云ヘルニ付、本使ハ其「アネタ」通信ハ知ラサルニ付何トモ御答ノ仕様ナキガ、本使トシテハカノ紳士協約以上ノコトヲ要求スル意思ナシト述ヘ置ケリ。

出發歸朝

筆者ノ申入ニ對シ十二月二十二日和蘭政府ハ異存ナシト返事シタカラ、同日筆者ハ暇乞ノ爲「ラ」ヲ訪問シ左ノ會話ヲ交換シタ。

一、「ラ」ハ昨日貴方ヨリ御申出ノ件ハ本國政府ニ於テモ異存ナシトノ通報ニ接シタリ、就テハ自分トシテ輿論ヲ指導シ昂奮ヲ押フル爲何等カ新聞ニ話ス必要アリト思考スルニ付、宣言案第一項ノ趣旨ヲ取入レ話

スコト、致シ度キ考ナリト云ヘリ、本使ハ自分ハ既ニ昨夕當地日本新聞記者ニ對シ自分ハ政府ノ訓令ニ依リ口頭ニテ詳細ノ報告ヲナス爲歸朝スルコト、ナレリトノミ語り、何等ノ「コンメンタリー」ヲモ附加セサリシト述ヘ置ケリ。

二、「ラ」ヨリカノ紳士協約ノ事ニ付政府ヨリ約束ヲナスコト相成ラストノ訓令ニ接シ、御別レノ最後ニ斯クノ如キ事ヲ御通告スルハ甚タ心苦シキ次第ナリト云ヘルニ付、本使ハ右ハ約束スル能ハスト云フコトニテ實際問題トシテ個々ノ場合ニ從來ノ如キ取扱ヲ爲スヲ拒マル、次第ニハ非サルヘシト聞ケルニ、「ラ」ハ自分トシテモ斯クナサルヘシト豫期スト云ヒ居タリ。

仍テ筆者ハ即日左ノ電報ヲ廣田外相ニ發シタ。

本二十二日本使暇乞ノ爲「ラ」往訪ノ際「ラ」ヨリ夫ノ紳士協約ニ付蘭國政府ヨリ約束ヲ爲スコトハ相成ラサル旨ノ訓令ニ接セルカ御別レニ際シ斯カル御通告ヲ爲スコト如何ニモ心苦シキ次第ナリト云ヘルニ付本使ハ右ハ單ニ正式ノ約束ヲ爲ス能ハスト云フコトニテ、實際問題トシテハ個々ノ場合ニ付従前通りノ取扱ヲ拒マルル次第ニハ非サルヘシト念ヲ押シタルニ「ラ」ハ今迄通り繼續スルヲ豫期スト述ヘ居タリ、右ニ付二十一日朝ノ磐城電報ハ今後會商再開迄蘭側ニテ何等新ナル制限措置ヲ執ラサル事ヲ約束セル體ノ通報ヲ發シ、之ニ關シ二十一日日本使「ラ」ト會見ノ際「ラ」ヨリ「リマーク」サレタル經緯アリ、其ノ爲、相當神經ヲ刺激セルコトカトモ存セラル。

此電報ト入達ヒニ左ノ電報カ來タガ、カノ紳士協約ノ件ハ既ニ報告済ノ通りデアルカラ、其儘ニ留メ、蘭印

總督ニ左ノ通り其一部ヲ披露シタ。

十二月二十二日廣田外相發。

一、貴代表御出發前自然總督等ニ御面會ノ節、貴官ハ一先ツ報告ノ爲歸國スルモ兩國代表部ハ依然存續ノコトニモアリ、帝國政府トシテハ本會商開催ノ目的ヲ達成スル爲今後ト雖モ自ラ友好的精神ヲ以テ最善ノ努力ヲ致ス覺悟ナルガ、蘭側ニ於テモ同様ナルヘシト確信スル旨、本大臣ヨリノ傳言トシテ可然申入レ相成度。

二、今後兩代表部カ依然存續スルコトヲ先方モ同意シ居ル以上、各種制限措置ニ付蘭印側ニ於テ必スシモ極端ナル措置ニ出ツヘシトハ豫想セサルモ、矢張り此ノ際貴電ノ紳士協定ニ付未タ先方ヨリ確定的回答ナキニ於テハ御歸朝前此點ヲ明確ナラシメ置ク様御配慮ノ程希望ス。

三、當方面新聞中ニハ貴地發電トシテ貴官引上ケニ際シ何等友好的「コンミニケ」スラ發セラレス云々ト報導シ居ルモノモアリ、會商今後ノ關係ニ付憂慮ノ向モ存スルニ付テハ、貴代表ハ本國政府ヘ報告懇談ノ爲歸國スルモ兩國代表部ハ依然「バタウキヤ」ニ於テ接衝ヲ繼續スルモノナルコトヲ可然方式ニテ發表シ置カル様致度。

四、本邦ヨリ出張セルモノハ全部此ノ際一先ツ歸朝セシムルコトトシ、貴地方面部員ヲ以テ代表部ヲ構成シ置カレ度シ。

十二月二十四日蘭印總督訪問ノ際ノ會談要領。

當方ヨリ出發ニ付暇乞ノ爲差支ナクハ訪問シ度シト連絡官「ファン・デル・プール」大佐ヲ通シ申入レタル處、二十四日十二時半午餐ノ招待アリシニ付、越田總領事ト共ニ目下「チバナス」別墅ニ滯在中ノ總督ヲ訪問ス。

一、食前書齋ニ於テ本使ノミヲ引見、會談約二十分、本使ヨリ先ツ飛行機墜落ニ對シ弔辭ヲ述ヘタル後、本日貴總督ヨリ午餐ノ招待ヲ受ケタル旨東京ニ通報セルニ、廣田大臣ヨリ其ノ節貴總督ニ傳言アリタシトテ別紙ノ電報ヲ受取レリトテ同電中ノ一ヲ讀ミ上ケタル處、總督ハ深キ謝意ヲ述フルト同時ニ廣田外相ガ會商ヲ通シ執ラレタル穩健且ツ和衷的態度ニ付衷心ヨリ感謝且ツ満足シ居ル旨ヲ轉達方依頼セリ。

次テ會商ノ談ニ入レルガ難駁ナル事ニテ特ニ書キ留メ置ク程ノ事モナキガ、其ノ内總督ガ水田ノコトニ關聯シ適當ナル水ノ補給ハ稻ノ發育ニ必要缺ク可ラサルガ分量過キテ洪水起ラバ禍生スト述べ、暗ニ日本品輸入量ニ關シ諷刺セルニ付、本使ハ如何ニモ天然ノ作用ニ付テハ此ノ如クナルヘシ、然シ經濟上ノ事ハ全ク別問題ニテ一般原則ニ左右セラル、故洪水狀態ハ決シテ永續スル「チャンス」ナカルヘク、結局需要供給ノ大原則ニヨリ平準ヲ得ル事ト確信ス、是ヲ無謀ナル柵ヲ設ケテ堰キ止メントスルハ極メテ有害ナリト信スト云ヘルニ、總督ハ當方トシテモ無論無謀又ハ極端ナル柵ハ設ケヌ積リナリト云ヒ居タリ。

二、食後雜談ノ際總督ハ日本ト蘭印トノ交渉カ困難ナル事ハ自分モヨク之ヲ感得シ得ル次第ニテ、蘭印側ニテハ砂糖ノ買付ヲ日本ニ要求セリトノ事ナルガ、日本ニテハ既ニ砂糖モ有リ餘リ居ルトノ事故、之カ買付ヲ要求スルカ如キハ全ク無理ノ注文ナリト思ハルト云ヘリ、本使ハ總督カ此言ヲナセル眞意何所ニアリ

ヤヲ疑ヒタルニ付態ト之ニ答ヘズ、蘭側ニテハ買付砂糖ヲ再輸出セザル事ヲ專ラ要求サレ居ルガ、自分ノ考ニテハ此ノ如キ事ハ賣主ト買主トノ間ニ商談ノ一分子トシテ取扱ヘバヨキコトニテ、之ヲ政府間ノ約束トナスカ如キハ當ヲ得スト思考スト云ヒタルニ、總督モ之ヲ首肯シ居タリ。更ニ總督ハ會商ニテ双方共云フヘキ事ハ既ニ云ヒ盡シタル次第ナレハ之ヲ如何ニ按配スルカハ今後政府間ノ取扱フヘキ事ナリト云ヘルニ付、本使ハ會商ニテ双方協議ノ基礎ハ既ニ出來上レル故、今後ノ問題ハ純技術的且ツ具體的事項ニシテ之ヲ政府間ニテ交渉スルハ決シテ其宜シキヲ得タルモノニ非ス、又事實上此方法ニテ解決センコトハ困難ト思ハル、ニ付、矢張り「バタヅキヤ」ニテ双方具體的問題ヲ捉ヘ協議スルコト實際的ナリト確信スト云ヘルニ、總督ハ或ハ然カラント云ヒ居タリ。

十二月二十二日廣田外相カラ「バタヅキヤ」會商開始以來六個月以上ノ長キニ亘リ、炎暑ノ地ニモ拘ラス折衝ニ盡瘁セラレタル貴代表始メ代表部諸員多大ノ御努力ニ對シ、茲ニ本大臣ノ謝意ヲ表ストノ電報ガ來タ。筆者トシテモ此常夏ノ地デ酷熱ト戰ヒ風土病ニ冒カサレツ、邦家ノ爲長イ間献身的ニ奉公ノ實ヲ示サレタ諸員ニ對シ、衷心カラ嘆美ト感謝ノ念ヲ捧ケル者デアル。又在留邦人諸君ガ一致團結、邦家ノ爲ニ利害關係ヲ超越シテ代表部ヲ援助サレシ赤誠ニ至ツテハ、誠ニ感激ニ堪エヌモノガアル。殊ニ此機會ニ一言シタキハ木村顧問ノ活躍デ、今次ノ會商ハ同氏ニ依リテ指導サレタト云フコトデアル、同顧問ハ單ニ對蘭關係ニ於テノミナラズ在留邦人ト代表部トノ仲介者トシテ萬般ノ考慮ヲ拂ヒ、相互ノ意思疏通ノ爲毎週一回定期會談ノ勞ヲモ厭ハナカツタ。代表部ト在留邦人トノ關係ガ今回ノ如ク異例ナ協調ヲ長時日間保チ得タノハ全ク同顧

問努力ノ賜物デ、筆者ガ大過ナク六個月有餘ノ會商ヲ爲シ遂ケ得タノモ、是亦同顧問苦心ノ結晶ニ外ナラヌ先年來「デリケート」ナ健康ノ持主タル同顧問ガ邦家ノ爲挺身爪哇出張ヲ諾シ、筆者ト共力スルヲ甘受サレタ高潔ナ犧牲的精神ニ對シ、筆者ノ抱ク欽仰ト謝意ヲ如何ニシテ表明スヘキカ、拙筆之カ言辭ヲ見出し得ヌノヲ頗ル遺憾トスル。

木村顧問ハ東京カラノ電報ガ餘リニ不徹底デ、當方トノ意思疏通ニ虧缺ガアル如ク思ハレタ爲、筆者ノ歸京ニ先チ之ヲ説明スルノ必要ヲ痛感シ、旅裝ヲ整フル暇モナク十二月二十二日未明急遽「バタヅキヤ」ヲ出發シ、翌日「スラバヤ」カラ直行船「ジヨホール」丸（一月三日神戸着）ニ乗船歸途ニ就イタ、筆者ハ三好通譯官ト共ニ二十五日「バタヅキヤ」發ノ「バナマ」丸デ歸京ノ途ニ上リ、一月十六日神戸ニ着イタガ、出發ノ前日事件ノ真相ヲ闡明シ在留邦人無用ノ不安ヲ芟除スル爲、在蘭印帝國領事ニ左ノ電報ヲ發シ、又同日夜「バタヅキヤ」日本人會主催ノ送別宴デ左ノ演說ヲ爲シ、歸途「スマラン」「スラバヤ」「マラン」及「マカツサ」デモ同様ノ説明ヲシタ、而シテ蘭代表部ハ「アネタ」ノ質問ニ答フル形式テ左ノ如ク發表シタ。在「スラバヤ」、「メダン」帝國各領事宛。

本使ハ會商ノ經緯報告ノ爲二十五日（隨員ハ一月九日迄ニ）出發歸朝ノ途ニ上ル事トナリタルモ、我代表部ハ勿論蘭代表部モ依然存在スル次第ナリ、然ルニ未タ會商妥結ニ到達セサル爲在留邦人中ニハ前途ヲ憂フルモノナキニ非スト存スル處、本使過去七ヶ月ノ交渉ニ於テ專ラ邦品ノ蘭印市場確保ト在留邦人ノ利益擁護トノ爲我主張ノ貫徹ニ努メタル結果、既ニ蘭側ニ於テモ之ヲ諒解スルニ至リ、其著シキ例トシテ、新

「サロン」輸入制限令及晒綿布輸入制限令案ニ於テハ邦商ノ最モ不愉快且ツ不利益トセル歐洲人商業組合加入ノ有無ニ依ル輸入商ノ資格標準ヲ廢シ、又在留邦人カ最モ不安ニ襲ハレ居タル營業制限條令ニ對シテハ其憂ヲ除去スルニ足ル一種ノ保障ヲ取付ケ得タル次第ナルニ付、在留邦人ハ濫リニ危惧ノ念ヲ抱カス、寧ロ一般的不況ノ對策ヲ講シテ難局突破ニ専念スル事本使ノ希望ニ堪ヘサル處ナルニ就テハ、貴管内在留邦人ニ對シ此等ノ點周知（公表セサル様）方御取計相成度シ。

右特ニ申進ス。

十二月二十四日日本人會講演。

一、十二月二十一日「バタヴキヤ」ニ於ケル金曜會最後ノ集會ニ於テ、木村顧問及私カラ有力在留邦人ニ對シ誤解及無用ナル不安發生ヲ防止スル爲、歸國ノ事情ヲ詳細説明シタニ拘ハラヌ、充分徹底セサリシモノカ、翌二十二日ノ日蘭商業新聞及二十三日ノ瓜哇日報特ニ前者ハ會商決裂シ在留邦人間ニ不安充ツ云々ト全ク右説明ニ反スル論說ヲ掲ケマシタカラ、直ニ兩新聞ニ對シ警告ヲ與ヘ反省ヲ求メテハ置キマシタガ此等邦字新聞ノ論說ハ蘭側ニ對シ可成リノ衝動ヲ與ヘシモノノ如ク、蘭代表部ニ於テモ輿論指導ノ爲必要ノ説明ヲ公表スル計畫ガアリマシタノニ鑑ミ、各種「デマ」ノ暗躍スルヲ防止シ、同時ニ諸君カ無駄ナ御心配ヲナサラス様、今回私カ歸國スルニ至ツタ事情ノ一切ヲ赤裸々ニ申上ケ様ト存シマス。

二、御承知ノ通り將ニ七ヶ月ニ垂ントスル會商中各種ノ難關カアリマシタ、此等ノ難關ハ時ニ乘リ越ヘルコトカ出來ナイト思ハレタ事モ屢々テシタカ、兩代表部ノ妥協的誠意ハ此等ノ難關ヲ突破シテ數世紀ニ亙ル

日蘭兩國間ノ友好關係ハ一糸モ亂サレルコトナク、殊ニ長イ會商ヲオ互ニ意見ノ交換ヲシ合ツタ結果、雙方ノ意思ハ非常ニ良ク疏通スルコトカ出來タノデアリマス、之ハ本會商ノ賜物テ決シテ看過シテハナラヌ重要事デアルト確信致シマス。

三、又會商中双方ハ主義上ノ意見交換ノミナラス具體的ニモ各種ノ提案ヲ出シ合ヒ意見ヲ交換シタノデアリマス、歩ミ寄りノ距離ハ未タ相當アリマス、然シ獨リ日本側ノミナラス蘭側テモ此歩ミ寄りカ出來ヌモノトハ考ヘテ居リマセン、只之ニ到達スルニハ藉スニ時ヲ以テスル必要カアリ、基礎工作ハ既ニ出來タノデアルカラ之ヲ補裝スル爲相當細カイ技術ヲ要スルノデアリマス。

四、換言スレハ今後ノ或ル期間ハ此鋪裝工作ニ之ヲ費ス必要カアリマス、何分ニモ文書ノ往復殊ニ電信テハ事情ヲ充分ニ徹底セシムル事カ出來マセンノテ、蘭側テハ曩ニ「ヘルデレン」カ歸リ又明後日ハ「イードンブルグ」カ報告ノ爲本國ニ出發シマス「ランネフト」ハ當地ニ要職ヲ持ツテ居ルカラ當地ヲ離ルル事出來ストノコトデアリマス。

私ノ歸國モ亦之趣旨ニ外ナラヌノテ、決シテ空氣ノ惡化トカ意見衝突トカノ爲テハアリマセン。

五、從テ私ノ出發後ハ越田總領事カ日本代表部ヲ主宰セラレ、又和蘭代表部モ矢張り存續シテ居ルノデアリマシテ、私ノ出發カ會商ノ決裂ヲ意味スル様ナコトハ少シモ無イノデアリマス、此ノ點誤解ナキ様與々モ希望致シマス。

六、私カ六月ニ着キマシテカラ今日迄ノ經過ハ諸君能ク御承知ノ通りテ、之ヲ事新シク申述ヘル必要ハア

リマセン、又手前味噌ニ互ル効能書ヲ御披露スルノハ蛇足且ツ不見識ト存シ差控ヘマスガ、何レニセヨ蘭印ニ於ケル對日空氣ハ私ノ着當時ニ比シ著シク改善サレタコトハ事實テアリマス、此空氣ヲ更ニ改善シ日本ト蘭印ト共存共榮ノ爲ニお互ニ握手シ合ツテ地歩ヲ進メル爲ノ工作ハ、單ニ官憲ノ力丈ケテハ到底出來ル事テハアリマセン、其原動力ハ實世界ニ活躍セラルル諸君ノ双肩ニ專ラ懸テ居ルノテアリマスカラ、諸君ニ於テモ充分ニ之ヲ自覺セラレ、和衷協同オ互ニ助ケ合ヒ此團結シタ力テ蘭印側ト友好的精神ニ基ク協力ノ道程ヲ辿ラレルナラハ、日本ト蘭印ノ關係ハ益々親密ニ赴ク事ヲ信シテ疑ヒマセン。

七、何ウカ私ノ出發致シマシタ後モ此趣旨ヲ益々御活躍アラン事ヲ希ヒ、茲ニ諸君ノ御健康及御發展ヲ祈ルト同時ニ本タノ御歡待ノ御禮ヲ厚ク申述ヘマス。

十二月二十四日「アネタ」通信。

長岡大使及其他ノ日本代表部員ノ出發ハ決シテ會商カ無益ナリシ事及條約カ締結不可能ナル事ヲ意味スルモノニ非ス、會商ハ確カニ相互ノ立場及困難ニ就テノ認識改善ニ資シタリ、種々ノ點ニ就テ誤解ハ一掃セラレ、双方ニ取り満足ナル了解ニ達シタリ、諸事件ノ推移ハ如何ナル點ニ於テモ兩國ノ良好ナル關係ヲ妨ケタル事ナシ、條約カ何レ成立シ得ルヤ否ヤハ諸關係ノ推移ニ依存ス、右關係ハ目下ノ所未タ條約ヲ可能ナラシムル程熟シ居ラサルモ、時間カ解決ヲ齎ス可能性アリ、尙ホ一方神戸ニ於テハ船會社間ノ商議開始セラレ、和蘭側トシテハJ社ノ外ニK P M社モ參加スヘシ。

第十章 會商ノ側面觀並雜感

會商零團氣ノ轉化ト蘭代表部員ノ言動

日蘭會商ノ經緯ハ以上ノ通りデ、我々ノ會商對策ガ事態ニ即シ肯綮ニ當ツテ居タコトヲ今尙ホ自信スル。上陸ノ際ノ「ステートメント」、總督ニ提示シタ四大原則、一般委員會ニ於ケル論戰、孰レモ皆先方ノ反省ヲ促シ其態度ヲ緩和サセンカ爲ノ工作ニ外ナラス、偶々蘭側ガ海運問題ノ上程ヲ固執シ、又各種派生問題ヲ涌起サセタ爲、委員會ノ開催ハ我々ノ豫期以上ニ遅延シ、此間先方ハ漸次我方ノ主張ヲ會得シ、其決心ヲ知ルト共ニ、不自然極マル制限力カ到底豫期ノ結果ヲ齎ラサルコトヲ事實ニ依リテ證明附ラレタ。九月下旬ニ於ケル「ランネフト」代表ノ考ヘノ持チ方ハ、確カニ會商ノ初期ノ夫レト大ナル相違デアルガ、既ニ記シタ通り蘭代表部ニハ種々ノ分子ガアリ、加フルニ總督府ガ之ヲ掣肘スルカラ、「ラ」代表ハ自己ノ所信ヲ忌憚ナク具體化スル自由ヲ有セヌ。元來日蘭會商ノ行ハル、ニ至ツタ主因ハ日本側カラ云ヘバ蘭印ノ設ケタ各種制限措置ノ爲テ、此等法令ノ發案者ハ「ウエレンスタイン」經濟長官デアル、氏ハ蘭代表部次席トシテ名ヲ列ネテ居タガ、會商開始當時ハ本國ニ歸還中デアツタ、此不在ハ果シテ氏ヲ絶對ニ必要トスル用務ノ爲デアツタカ、或ハ又其會商參加カ交渉ノ進展ニ資セヌトノ見地ヨリスル召還デアツタカ、推斷ノ限リデハナイガ、氏ハ八月五日病ノ爲海牙デ物故シタ。後任「ハルト」氏ハ長ク「スラバヤ」ニ在リ當時蘭印企業家聯盟會長ヲ